

高知女子大学看護学会創立 50 周年記念事業

高知女子大学看護学会 創立 50 周年記念学会

歴史を踏まえて
未来の看護学を
デザインする



*50th Anniversary
University of Kochi
Nursing Science Society*

日 時 : 令和 7 年 7 月 19 日(土) 9:30~16:30

7 月 20 日(日) 9:00~12:00

場 所 : 高知県立大学 池キャンパス、オンライン

主催 : 高知県立大学看護学会

共催 : 高知県立大学看護学部・看護学研究科、高知県立大学看護学部同窓会

後援 : KUTV テレビ高知、KSS さんさんテレビ、エフエム高知

学会長 あいさつ

高知女子大学看護学会は、高知女子大学看護学科/衛生看護学科（現高知県立大学看護学部）の卒業生に研究の機会と交流の機会をという願いにより、昭和 51 年に和井兼尾先生（初代会長）の発議により発足しました。そして、創立 50 年に当たる節目の年を迎えました。和井兼尾会長、山崎智子会長、山崎美恵子会長、松本女里会長には、長年にわたり学会の充実・発展にご尽力いただきました。半世紀にわたり、多くの卒業生・修了生の皆様に運営委員を担っていただき、会員の皆様、地域の看護職の皆様の皆様のご支援・ご協力のもと、50 年を迎えることができましたことを心から感謝申し上げます。

本学会は、わが国の看護界で最初に誕生した学会として、新たな看護の「知」を創造し、看護学の進歩発展に寄与するとともに、同窓会機能も兼ね備えた学会として、卒業生・在学生・教員が看護学を探究する場として、スタートしました。その後、学会を地域の看護職の方々にもオープンにし、卒業生・修了生・在学生・教員・地域の看護職の皆様と看護学を探究する場、研究—実践—教育をつなぎ、新たな概念・研究課題・学際性や最新の保健医療看護などを取り上げた学会の開催、学会誌の発刊、公開講座の開催など、毎年積み重ねてまいりました。大学院看護学研究科修士課程修了生を送り出した平成 22 年 7 月に看護学部同窓会を設立し、同窓会と学会が協働して活動することになりました。平成 23 年には高知県立大学に校名変更され、令和 7 年 3 月までに、高知県立大学看護学部卒業生 2,527 名、高知県立大学大学院看護学研究科博士前期課程修了生 353 名、健康生活科学研究科（看護学領域）・看護学研究科博士後期課程修了生 78 名、博士課程修了生 8 名となりました。高知女子大学看護学会が高知県立大学看護学部卒業生、大学院看護学研究科修了生を学会員としてお迎えし、今後、さらに学会として発展していくことを考え、創立 50 年の節目に名称を「高知県立大学看護学会」に変更し、この歴史を皆様と一緒に感謝するとともに更なる発展を祈念して、これまでの 50 年の実績を礎に、皆様と共に「看護学の発展とケアの価値の浸透」に貢献できるように努めてまいる所存です。

皆様からのご支援を頂きながら、令和 8 年 3 月までを「高知女子大学看護学会創立 50 周年記念 year」として、記念事業を進めております。高知女子大学看護学会創立 50 周年記念学会は、第 51 回高知県立大学看護学会として位置づけ、メインテーマを「歴史を踏まえて未来の看護学をデザインする」としました。南裕子先生、西村ユミ先生、美代賢吾先生、藤田佐和先生にご登壇いただき、記念学会を開催できますことを心から感謝申し上げます。先生方のお考えを拝聴しながら、参加者の皆様お一人おひとりが、看護専門職として自分が歩んできた道のりを踏まえて、未来の看護学をどのように創っていくか、思いを巡らせる機会となることでしょう。午後に開催するリレートークでは、本学の卒業生・修了生・

高知女子大学看護学会創立 50 周年記念事業

在学生の代表として、岡谷恵子氏、中島信恵氏、大川宣容氏、田鍋雅子氏、所和香子氏、田中圭氏、依岡美里氏に、看護専門職として力を入れて取り組んできたことや未来の看護学についての考えなど、自由に語っていただきます。学会 2 日目には、分科会を開催し、交流の時間を準備しております。重要な節目の年を記念した学会参加を通して 先人たちの刻んできた学会を振り返るとともに、これからの 50 年への新たな一歩を踏み出しましょう。

高知県立大学看護学会は、高知女子大学看護学会の歴史を礎に、今後も更なる発展を目指して努力を重ねてまいります。会員の皆様、地域の看護職の皆様には、引き続き温かく見守っていただきますよう、お願い申し上げます。

令和 7 年 7 月

高知県立大学看護学会

学会長 野嶋 佐由美

学会 プログラム

* 7 月 19 日 (土) *

9 : 30 ~ 開会の辞

高知県看護協会 会長 あいさつ

高知県立大学看護学部同窓会 会長 あいさつ

9 : 40 ~ 会長講演

「高知女子大学看護学会 50 年の歩み —高知女子大学
看護学会から高知県立大学看護学会へと、看護学・研究
の発展に向けての軌跡—」

講師：野嶋 佐由美（高知県立大学看護学会 学会長）

座長：中野 綾美（高知県立大学看護学会 運営委員長）

10 : 05 ~ 記念講演 1

「看護学の発展は臨床看護の質を向上させたのか？
—学会の役割は？」

講師：南 裕子（看護未来塾世話人代表、高知県立大学初代学長、高知県立大
学・聖路加国際大学・兵庫県立大学・神戸市看護大学 名誉教
授、元国際看護師協会会長、元日本看護協会会長、日本学術
会議元会員）

座長：野嶋 佐由美（高知県立大学看護学会 学会長）

11 : 00 ~ 記念講演 2

「看護の哲学からケアサイエンスへ
—ケアに価値を置いた未来へ—」

講師：西村 ユミ（東京都立大学 副学長／健康福祉学部看護学科・人間健康
科学研究科看護科学域 教授）

座長：中山 洋子（高知県立大学看護学部同窓会 会長）

12 : 05 ～ 学会総会

13 : 30 ～ 記念講演 3

「情報の力で造形する看護の未来 ―デジタルは、これまで看護に何を刻み、これから何を描くのか―」

講師：美代 賢吾（国立健康危機管理研究機構 システム基盤整備局医療情報管理部 部長／東京大学大学院医学系研究科医療 AI・デジタルツイン開発学 特任教授）

座長：久保田 聡美（高知県立大学看護学部 教授）

14 : 35 ～ リレートーク

スピーカー：岡谷 恵子（看護学科卒業生／特定 NPO 法人日本慢性疾患セルフマネジメント協会 理事長、元日本看護協会 専務理事、元近大姫路大学・東京医科大学・四天王寺大学 教授）

中島 信恵（看護学科卒業生、大学院修士課程修了生／高知県看護協会 専務理事）

大川 宣容（看護学科卒業生、大学院博士後期課程修了生／高知県立大学 看護学部 学部長・教授）

田鍋 雅子（看護学科卒業生、大学院修士課程・博士後期課程修了生／高知医療センター 看護局長）

所 和香子（看護学科卒業生、大学院博士後期課程在学生／カナダ・ブリティッシュコロンビア州 Royal Jubilee Hospital Nurse Practitioner）

田中 圭（大学院修士課程修了生／長崎医療センター 医療相談支援センター係長・がん看護専門看護師）

依岡 美里（看護学科卒業生、大学院博士前期課程修了生、後期課程在学生／高知県立大学 看護学部 助教）

司 会：畦地 博子（高知県立大学大学院看護学研究科 研究科長／看護学部 教授）

* 7 月 20 日(日) *

9 : 00 ~ 記念講演 4

「その先へ ―看護の軌跡と未来の実践への期待―」

講師：藤田 佐和（高知県立大学大学院看護学研究科 特任教授）

座長：大川 宣容（高知県立大学看護学部 学部長・教授）

10 : 10 ~ 分科会

A : 災害看護・精神看護

ファシリテーター：田井 雅子（高知県立大学看護学部 教授）

B : 家族看護・基礎看護・共創看護

ファシリテーター：瓜生 浩子（高知県立大学看護学部 教授）

C : 地域看護・在宅看護・老人看護

ファシリテーター：岡本 充子（近森会グループ 統括看護部長）

D : がん看護・急性期看護・慢性期看護

ファシリテーター：大川 宣容（高知県立大学看護学部 学部長・教授）

E : 看護管理

ファシリテーター：多田 邦子（高知大学医学部看護学科 教授）

F : 母性看護・小児看護・学校保健

ファシリテーター：嶋岡 暢希（高知県立大学看護学部 教授）

G : 看護教育

ファシリテーター：長戸 和子（高知県立大学看護学部 教授）

H : オンライン（全領域）

ファシリテーター：藤田 佐和（高知県立大学大学院看護学研究科 特任教授）

会長講演 要旨

高知女子大学看護学会 50 年の歩み

—高知女子大学看護学会から高知県立大学看護学会へと、 看護学・研究の発展に向けての軌跡—

講師：野嶋 佐由美

高知県立大学看護学会 学会長

本学会は 50 年前に和井兼尾先生の強い発案とリーダーシップにより船出することができた。第 1 回の高知女子大看護学会が開催され、その後、メインテーマを掲げ、基調講演、シンポジウム・分科会、研究発表、公開講座など多彩な活動を展開してきた。メインテーマは「大学の看護教育を考える」「看護概念を考える」「人間の発達」「保健行動」「家族」「症状マネジメント」「ケアの質を高めるための方略」「看護のエキスパートネスー看護ケアの専門性の確立を目指して」「看護倫理を考える」「看護の『わざ』と『知恵』の開発を目指して」「看護とコラボレーション」「ヘルスケアをデザインする」「社会に示す看護の力」「看護の社会的責任」「未来の看護を創る人材を育成する教育」「看護を拓くナラティブアプローチ」「看護を可視化する方略」「ケアとキューアの融合を探索する」「人生 100 年時代の看護の Shift」「看護におけるイノベーションの創出」「新たな看護の知を“共”に“創”ろう」と変遷してきた。

研究については、看護系学会が数少なく、研究発表をする機会も少ないことを憂慮して、発表の場を設けるために出発したと言っても過言ではない。隔年で活発な研究発表がなされた。しかし、看護系の専門学会が台頭する中で、全国の専門学会で研究発表することの意義を重視し、第 30 回学会を最後に口頭による研究発表は中止することになった。そして、学会員には専門学会での発表と本学会の学会誌への投稿を奨励する方針に転向した。研究発表の受け皿として、平成 10 年、第 23 回より高知女子大学看護学会集録から、「看護の研究・学術の進歩を促し、看護の実践・教育・研究の質の向上に貢献し、社会から十分な評価を得られるような学会誌」—高知女子大学看護学会誌—へと発展してきている。第 35 巻から論文の種類も数も増加し、毎年 2 号の発刊を積み重ねている。さらに、同年の平成 10 年に看護学研究科の発足を記念して、次世代育成を目指して、奨学金制度を開始した。

もうひとつの本学会の特徴は、早期より、地域社会に開かれた学会としての自覚をもって活動してきたことである。看護学科創設 30 年の時に一般市民を対

象とする公開講座を、1991 年からは、毎年看護職を対象とする公開講座を今日まで継続している。このように、高知県の保健医療、看護の質向上に取り組んできた歴史があり、今後とも重要な特徴として継続していく。

本学会は同窓会としての機能も兼ねて出発してきた。学会員の資格者は、高知女子大学家政学部衛生看護学科・看護学科卒業生、高知女子大学看護学部看護学科卒業生・看護学研究科修了生・健康生活科学研究科修了生、高知県立大学看護学部看護学科卒業生・看護学研究科の修了生である。また、振り返ってみると、会長を務められた和井兼尾先生、山崎智子先生、山崎美恵子先生、松本女里先生、そして研究科長として森下利子先生、鈴木志津枝先生、学部長として中野綾美先生、藤田佐和先生、現在の大川宣容学部長、畦地博子研究科長の献身によって運営されてきた。このように、本学会は卒業生・修了生によって支えられ、卒業生・修了生とともに、変わることはない看護学の本質となる現象と変革が求められている現象の両方に光を当て、看護学を探究し、実践・教育・研究の質の向上に寄与することを目指してきた。今後共、本学会は同窓生とともに、地域に開かれた、看護学を追究する学会としての発展を目指していくこととなる。

高知県立大学看護学会は、看護学の固有性、独自性をコアとしつつ、周辺の学問領域の知識や情報社会の革新的な方法や技法を、また、知識駆動の社会のなかでの方略を積極的に取り入れて看護学のものとし、賢く次世代の看護学・研究を発展させていくこと、その結果として多彩な発展の軌跡を歩んでいくことを願っている。

【講師略歴】

学歴：1973 年高知女子大学家政学部衛生看護学科卒業、1978 年明治学院大学社会学部社会学研究科博士前期課程修了（社会学修士）、1989 年 University of California San Francisco 看護学部博士課程修了（看護学博士）

職歴：1975-1977 年医療法人精華園就職 勤務、1997-2009 年高知女子大学家政学部看護学科、高知女子大学看護学部・研究科教授、2002-2010 年高知県立大学看護学部学部長、2011-2021 年高知県立大学副学長・学長、2022-2024 年高知県立大学看護学研究科特任教授、現在 高知県立大学名誉教授

社会活動：日本看護系大学協議会 理事長、日本看護系学会協議会 理事長、日本家族看護学会 理事長、日本看護科学学会 理事、高知県看護協会 第一副会長など

著書：ナースによる心のケアハンドブック（野嶋佐由美・南裕子、照林社、2000 年）、家族エンパワーメントをもたらす看護実践（野嶋佐由美・中野綾美、へるす出版、2005 年）、看護における研究（南裕子・野嶋佐由美、日本看護協会出版会、2008 年）、精神看護学：明解看護学双書（野嶋佐由美編、金芳堂、2013 年）など

記念講演 1 要旨

看護学の発展は臨床看護の質を向上させたのか？

－学会の役割は？

講師：南 裕子

看護未来塾世話人代表、高知県立大学初代学長、
高知県立大学・聖路加国際大学・兵庫県立大学・神戸市看護大学 名誉教授、
元国際看護師協会会長、元日本看護協会会長、日本学術会議元会員

高知県立大学看護学会が半世紀の歴史を刻んできたことは素晴らしく、お祝い申し上げます。高知県立大学の前身である高知女子大学に衛生看護学科が誕生したのは 1952 年だから、それからいえば 73 年目ということになりますね。

看護は看護師を育てる職業教育の歴史が長かったが、看護学を学ぶ大学教育を 6 大学で行っていた時期は 40 年あり、1990 年代からやっと本格的に看護学教育が大学および大学院において行われるようになった。しかし、2025 年の時点で養成所全体の入学定員のなかで大学入学定員は 40% である。看護学を基盤とする看護職の教育はまだ道半ばとはいえ、隔世の感がある。また、大学入学定員に対して大学院修士課程への入学定員（1500 人）は、6% 前後のようである。高度実践看護師の数があまり増えてないのはそのためであろう。博士後期課程の定員は 300 人程度といわれる。博士後期課程の修了生の大半は臨床から離れた教育・研究に専念しているので、実践科学としての看護学の専門家はまだまだ少ないといえよう。

近年、医療経済の抑制を目指した効率性を重んじる政策が急速に導入されているが、そのなかで看護界では大混乱が起こっている。看護学が重んじてきた「ケア」または「療養上の世話」離れが、臨床看護の現場から、また、患者体験から窺えるからである。

過去 50 年にわたる看護学の発展が、看護を受ける人々にどのように反映してきたかを経験知をもとにして考えていることを述べたい。

【講師略歴】

1965 年に高知女子大学を卒業後、横浜市民病院で看護師、アメリカで交換看護師の経験後、イスラエルのヘブライ大学社会医療学修士課程（MPH）、アメリカのカリフォルニア大学サンフランシスコの看護学博士後期課程（DNSc）を修了。教育経験としては、高知女子大学（現、高知県立大学）、聖路加看護大学、兵庫県立大学、近大姫路大学（現、姫路大学）、高知県立大学、神戸市看護大学において、内、22 年間は学長。

日本看護協会会長、国際看護師協会会長など職能団体での活動と並行して、日本看護科学学会、日本看護学教育学会等の役員、日本災害看護学会や世界災害看護学会の立ち上げと運営など。日本学術会議の会員・連携会員。フローレンス・ナイチンゲール記章、瑞宝中綬章等の受章。

記念講演 2 要旨

看護の哲学からケアサイエンスへ

—ケアに価値を置いた未来へ—

講師：西村 ユミ

東京都立大学 副学長

健康福祉学部看護学科・人間健康科学研究科看護科学域 教授

現象学の思想は、19～20 世紀の数学的・実証的な科学的認識に対する批判的諸動向の一つとして成立した。その根本動機の一つは、“自然科学的な方法論の一面性”を批判し、そこに潜む先入見を取り払い、ありのままの直接経験に今一度立ち返ろうとすることだ。私はこの現象学を手がかりに、植物状態患者に関わる看護師の身体を介した交流、看護学生や新人看護師の「病い」と出会うことの意味、経験を積んだ看護師たちの語りによる実践知の生成、急性期病院での 1 対 1 のケアに含まれる協働実践などを探究してきた。ここで見出したことは、「ケア」は一方から他方へと提供される行為、あるいはケアする者がその行為によって逆にケアを受ける、という発想を超える、「二人（みな）で一つの行為を創り出すこと」や「相手への応答の中に相手の状態が包含されそれがケアを生みだすこと」などであった。

この発想を見出しつつある頃に、日本学術会議第 23 期の看護学分科会に特任連携会員として加わり、複数の学問分野が取り組むケアに関する研究に横串を刺し、それを総括するケアサイエンスという新学術領域を構想する入口に関わった。その後、第二部会員となり、「少子高齢社会におけるケアサイエンス分科会」の設置と議論に関わった。この分科会では、多様な学問分野の委員と議論を重ね、複数回の公開シンポジウムを開催し、未来の学術振興構想にも提案をするなどの活動をしてきた。現在、第 26 期は、「共生社会に向けたケアサイエンス分科会」と名称変更して、さらに分野を広げ患者会等の市民を巻き込んだ活動をしている。そこでの重要な方針は、市民の誰もがケアしケアされる立場にあり、誰もが取り残されることのないケア共同社会を実現することである。

ケアサイエンス分科会と並行して、看護学分科会においても、看護DXや地元創成看護学に関する報告を発出して、市民の隅々にまで看護が届くこと、それぞれの地元の健康課題へと対応する提案をしてきた。第 26 期には、看護学分科会を「ヘルスケア人材共創に向けた看護学分科会」と名称変更し、国家資格を有する健康関連専門家とのケアの共創を提案している。この発想は、人口減

少・偏在によって、専門職も偏在し、すべての市民へ医療やケアが届き難くなるという課題を、医療・福祉関連専門職が「ヘルスケア人材」として共有し、活動を共創すること、及びそれを実現させる新たな教育を共創・提案・構築することを推進する。

これらの議論の基盤には、多職種や市民と共に創るケアという発想があった。本講演では、現象学的研究からケアの共創までを振り返り、ケアに価値を置いた未来における看護学の貢献を検討・提案したい。

【講師略歴】

東京都立大学健康福祉学部看護学科、人間健康科学研究科看護科学域 教授。
2025 年 4 月より副学長。

2000 年日本赤十字看護大学大学院博士後期課程修了、博士（看護学）。日本赤十字看護大学講師、静岡県立大学看護学部助教授、大阪大学コミュニケーションデザイン・センター（CSCD）准教授を経て現職。2015 年臨床実践の現象学会設立、主宰。2020 年より日本学術会議第二部会員。日本看護系学会協議会理事、日本看護学教育評価機構評議員、日本看護科学学会副理事長など。

著書に、『語りかける身体—看護ケアの現象学』（ゆみる出版、2001；講談社、2018）『交流する身体—〈ケア〉を捉えなおす』（NHK 出版、2007）、『看護実践の語り—言葉にならない営みを言葉にする』（新曜社、2016、日本医学哲学・倫理学会学会賞）、『急性期病院のエスノグラフィー—協働実践としての看護』（新曜社、2020）、『医療とケアの現象学—当事者の経験に迫る質的研究アプローチ』（ナカニシヤ出版、2023）ほか。

記念講演 3 要旨

情報の力で造形する看護の未来 —デジタルは、

これまで看護に何を刻み、これから何を描くのか—

講師：美代 賢吾

国立健康危機管理研究機構 システム基盤整備局 医療情報管理部 部長

東京大学大学院医学系研究科医療 AI・デジタルツイン開発学 特任教授

もし、まだ電子カルテが導入されていない病院で働いているなら、ナースステーションの周りを見渡して、そしてテーブルの上を眺めてほしい。もうすでに電子カルテが導入されているのであれば、昔を思い出してみよう。テーブルの上には、経過記録、熱型表、処置箋、処方箋、食事箋、物品請求伝票、検査結果表などが置かれている。ナースステーションの壁際の棚には、所狭しとレターボックスが並べられ、そこには、輸血申込書、放射線検査送り書、手術申込書、退院時サマリーなど、業務に必要な様々な用紙が収められている。

なぜ、これほどまでにたくさんの紙に埋もれて仕事をしているのか。それは、それぞれの用紙に対応した業務があるからであり、つまり紙の種類だけ業務の種類が存在している。その紙を使って、情報を収集し、情報を提供し、計画を立て、情報を分析し、誰かに情報を伝え、そして業務の中で得られた情報をサマリーとしてまとめている。そう考えると、意識はしていないかもしれないが、看護業務の本質の多くの部分は実は情報処理である。

ケア技術やコミュニケーション技術はもちろん重要なのは言うまでもない。しかしもし、それ以外の看護業務の多くが情報処理であるのであれば、我々が持つべき道具は 4 色ボールペンだろうか、それともコンピュータだろうか。

紙という物理的な物質に定着・固着していた情報は、情報システムの力によって、時間と空間を超えることが可能になった。電子カルテは、過去の膨大な記録から必要な情報を検索して提示し、その情報を離れた場所でも共有することを可能にした。また点滴接続時のバーコード 3 点認証システムに代表されるように、コンピュータの持つ正確性はヒューマンエラーの防止にも活用されている。これは、患者安全にも貢献するとともに、実は医療者自身をも守っている。そして、医療や看護に活用される情報システムは、提供する機能の裏側で診療情報をデジタル情報として膨大に蓄積してきた。

今、その膨大なデジタル情報をもとに、様々な医療 AI が開発されはじめている。これまで人間固有の能力とされていた、重要な情報を選別しまとめる力

も今の医療 AI は獲得しつつある。これまで、我々は何を電子化するのか、何をデジタル化するのかを考えてきたが、もはや、我々に求められているものは何なのか、何を人間が行うべきなのか、を選択する時代に入りつつある。この講演では、これまでの医療・看護の情報化を振り返りつつ、その先に来る医療・看護の形をみなさんと創造していきたい。

【講師略歴】

1994 年東京大学医学部保健学科卒業。看護師、保健士の免許を取得し、東京大学医学部附属病院脳神経外科で看護師として勤務。その後大学院を経て、1998 年東京大学医学部附属病院中央医療情報部に着任。神戸大学医学部附属病院医療情報部副部長・講師、東京大学医学部附属病院企画情報運営部部長・准教授を経て、2015 年に国立国際医療研究センターに異動。同医療情報基盤センター長を経て、現在国立健康危機管理研究機構の医療情報管理部部長。2023 年より東京大学大学院医療 AI・デジタルツイン開発学特任教授を併任。専門は、医療情報学、看護情報学。特に医療安全や操作性向上のための電子カルテ機能の設計開発、大規模医療 RWD データベースの構築。博士（医学）。

記念講演 4 要旨

その先へ ―看護の軌跡と未来の実践への期待―

講師：藤田 佐和

高知県立大学大学院 看護学研究科 特任教授

1952 年、高知女子大学に 4 年制大学として全国初となる看護学科が誕生し、1976 年には高知女子大学看護学会が創立された。“看護の専門性とは”、“看護学とは”、“看護の方向性”を問い続け、歴史と伝統を礎に、常に時代の先を見据えて新たな挑戦をし続けている。1982 年、何気なく入学し卒業した高知女子大学には「その先」があった。

臨床の知が蓄積され体系化する、研究成果に基づく理論が構築され、看護学が進歩・進展して新たな看護が創造される。看護実践に還元され質向上がなされてこそ、看護が実践の科学になるであろう。未来を展望するにあたり、専門分野を通して実践の深化・拡大と期待を述べ、皆様から大胆な発想の転換となるご意見をいただきたい。

その前に、看護界では 1981 年に日本看護科学学会が発足し、1987 年に看護学として初めて日本学術会議学術研究団体として登録された。2001 年には日本看護系学会協議会が設立され、2025 年現在、会員学会は 51 学会となる。また、1975 年日本看護系大学協議会が発足し、看護学教育の質保証・向上や高度実践看護師教育課程の推進等の事業がなされており、2025 年現在、会員校は 307 校となる。大学院教育については、1980 年に看護学の大学院修士課程が設置され、1993 年には日本で初めて看護学博士が誕生した。専門看護師教育課程は 1998 年に 26 単位、2011 年には 38 単位の高度実践看護師教育課程となり、現在 3,473 名（2024.12）の専門看護師が全国で活躍されている。

先端技術の画期的な革新、超高齢社会・少子化、感染症パンデミック、DX 化、グローバル化などに伴い、人々の暮らし、働き方、社会の価値観の急速な変化の真ただ中、人々がその人らしく尊厳をもって生涯過ごすことができる未来社会に向けて、看護の進む新たな方向への手がかりをつかみ、次のステップに進む必要があるのは明白である。VUCA の時代にあっても看護として本質的なもの、変化に合わせて変更しなければならない看護、変化に応じて新たに創っていかなければならない看護について、皆様と“看護実践の質向上”、“社会連携”、“国際的発展”の視座から未来の実践への手がかりを検討したい。

【講師略歴】

学歴：1982 年 3 月高知女子大学家政学部看護学科卒業、1986 年 3 月筑波大学大学院医科学研究科修士課程修了（医科学修士）、2001 年 9 月聖路加看護大学大学院看護学研究科博士課程修了（博士（看護学））

職歴：1982 年 4 月筑波大学附属病院看護婦、1986 年 4 月東京都立医療技術短期大学看護学科助手、1989 年 4 月 高知女子大学家政学部看護学科講師、助教授（1992～）、教授（2003～）、2011 年 4 月高知県立大学看護学部/看護学研究科教授、看護学研究科長（2014～2018.3）、看護学部長（2018～2024.3）、2025 年 4 月高知県立大学大学院看護学研究科特任教授、高知県立大学名誉教授

社会活動：日本看護系大学協議会理事・委員会委員、日本がん看護学会理事・理事長、中国・四国広域がんプロ養成コンソーシアム理事・幹事校、高知県看護協会第一副会長など

リレートーク 要旨

【スピーカー：岡谷 恵子】

臨床看護経験は内科病棟で2年、精神科病院で4年の6年間、職能団体で12年、看護系短大・大学・大学院で16年仕事をしてきました。新規に3校の大学・学部を創設し、キャリア全体を通して様々な挑戦の機会を得ることができたのは幸運でした。

看護は専門職ですが、国の医療保険制度に組み込まれていて様々な制約を受けます。専門職としての自律性を確保し看護の本質を具現化していくために必要なことは何か、制度・政策という観点から思いを語りたいと思います。

【スピーカー：中島 信恵】

1984年に高知女子大学看護学科を卒業。高知県で駐在保健師10年、保健所10年、本庁13年など。2022年保健推進監を最後に定年退職後、再任用を経て、2024年6月から高知県看護協会理事。

行政保健師として、すべての健康レベルの人を支援するケアシステムの構築を目指してきました。異動を重ねることで所属や職位によって責任を持つ地域や分野は異なりましたが、地域に責任をもつ保健師の役割を語りたいと思います。

【スピーカー：大川 宣容】

高知女子大学家政学部看護学科卒業、千葉大学大学院看護学研究科博士前期課程修了、高知県立大学大学院健康生活学研究科博士後期課程修了。兵庫県立成人病センター、高知赤十字病院での看護師経験を経て、平成10年より高知女子大学看護学部。令和6年より高知県立大学看護学部長。

「対象が自らの力を発揮できること」が私の看護の原点です。対象は変わっても、看護の軸は揺るぎません。変化する社会・医療環境に柔軟に対応し、学生も教員もそれぞれの可能性を広げられる高知県立大学看護学部でありたいと願っています。看護の歴史から学び、その本質を見極めながら、未来に向けて新たな価値の創造に挑戦していきます。

【スピーカー：田鍋 雅子】

高知女子大学家政学部看護学科卒業、高知県立大学大学院看護学研究科修士課程・博士後期課程修了。高知県立中央病院、高知医療センターで勤務し、2015年4月より高知医療センター看護局長。

看護管理者として病院・看護局の理念の実現をめざして、看護師育成、体制整備に取り組んできました。VUCAの時代、“私たちの看護を育てること”を忘れずに、看護管理者らと共に成長する看護組織となって、地域に貢献したいと考えています。

【スピーカー：所 和香子】

高知女子大学卒業後、虎の門病院分院での看護師経験を経て、渡加。Registered nurse (RN)免許を取得後、病院勤務。その後、University of Victoria の修士課程を修了、ナースプラクティショナー (NP) 免許取得。以後、カナダ・ブリティッシュコロンビア州にある Royal Jubilee Hospital の循環器外科病棟で NP として勤務。

患者と共に課題を見つけ、解決策を協働で創出する「Co-Design」の枠組みに基づき、実践現場でのケアの質向上 (Quality Improvement) に取り組んだプロジェクトを紹介します。

【スピーカー：田中 圭】

九州がんセンター緩和ケアセンター専従看護師を経て、現在は長崎医療センター医療相談支援センター係長を務める。

所属学会等：日本がん看護学会代議員（頭頸部がん看護特別関心グループ代表）頭頸部がんサポート研究会世話人、株式会社 michiteku LINCS プロジェクト外部委員など。

長崎県では 2025 年に老年人口がピークになるといわれており、2040 年問題はすでに始まっています。持続可能な医療提供体制を維持するため、医療圏を超えたネットワークづくり（医療・福祉・介護・行政・市民との）に力を注いでいます。今回はその活動を紹介させていただきます。

【スピーカー：依岡 美里】

高知県立大学看護学部卒業。高知県立大学大学院看護学研究科博士前期課程（共創看護学領域）修了。現在、博士後期課程に在学中。ICU 看護師、市役所保健師を経て、現在は高知県立大学看護学部で教員として勤務。

臨床で看護師として働く中で「生活とは何か」「人と人はどう関わるか」が大きなテーマとなりました。最初にその問いを持たせてくれた母校に戻り、看護を実践する場を変えながら、研究者としても探究を続けています。

分科会

A：災害看護・精神看護 【会場 C 3 1 3】

B：家族看護・基礎看護・共創看護 【会場 C 1 1 2】

C：地域看護・在宅看護・老人看護 【会場 C 3 1 0】

D：がん看護・急性期看護・慢性期看護 【会場 C 2 2 0】

E：看護管理 【会場 C 3 0 9】

F：母性看護・小児看護・学校保健 【会場 C 3 1 4】

G：看護教育 【会場 C 2 0 9】

H：オンライン（全領域） 【Web ミーティング】

高知県立大学看護学会



(連絡先)

〒781-8515 高知市池2751-1 高知県立大学看護学部内

FAX : 088-847-5524

E-mail : kwuaonaddress@cc.u-kochi.ac.jp

高知県立大学看護学会ホームページ <https://www.u-kochi.ac.jp/~nsgakkai/>

facebook <https://www.facebook.com/nsgakkai>